



バックナンバーや屋久島国有林における入林申請等は
こちらにあります
http://www.rinya.maff.go.jp/kyusyu/yakusima_hozen_c/



鹿児島県熊毛郡屋久島町宮之浦1577-1

TEL0997-42-0331 FAX0997-42-0333

令和元年度「屋久島森の塾」開催

— 小杉谷の歴史や屋久島の植物などを知る — (7月31日)

当センターでは、平成30年度から町内小学校教職員を対象とした「屋久島森の塾」に取り組んでおり、今年度は屋久島森林管理署及び屋久島町教育委員会共催のもと、小杉谷小・中学校跡地で実施しました。

「屋久島森の塾」は、子供たちに直接環境教育等を指導されている教職員の方々に屋久島の森林・林業に対する理解を深めていただき、授業での積極的な活用を図るなど森林環境教育の推進を目的としており、今年度は町教育委員会のご協力により中学校にも門戸を広げ、小・中学校の17名の教職員の方々に参加をいただくことができました。

当日は晴天の中、①小杉谷周辺の植物観察、②林業遺産、③小杉谷の歴史、④丸太切りなどのカリキュラムを行いました。参加者からは「トロッコ道敷設に驚きと尊敬」「自分たちでは知り得ない歴史が分かった」「経験できない体験ができてよかった」「労働は大変」等の感想をいただきました。そして、来年も機会があればぜひ参加したいとのうれしい言葉をいただき、大盛況の中で無事に終了しました。



奥村指導官の小杉谷の歴史の講義に耳を傾ける参加者



真剣に丸太切りをする参加者



樹木の話に聞き入る参加者

屋久島産木材の需要拡大を!③— 屋久島地杉の特徴を活かした販売戦略 —

屋久島町役場の木造新庁舎建設に当たっては、島内外への木材需要拡大を図ることがひとつの目的とされています。(7月号までに掲載)

戦後植林された人工林は、間伐が必要な林分が増加し、地球温暖化防止対策としても間伐の推進が必須となり、国有造林地及び前岳を中心とした分収造林地や民有林についても間伐が積極的に実施されるようになりました。平成18年10月には、国有林材を主体とした「スギ人工林の島外出荷」が初めて行われ、間伐材も島内外へ販売することとなり、出荷数量は年々増加し販路・需要拡大へと取り組まれました。

これからは、豊富な人工林資源を有効的に活用し、主伐・再造林を行い資源の循環利用が重要となります。しかし、屋久島は離島というハンディもありますので、関係機関や林業事業者等が現状と課題を捉え、出口対策(販路・需要拡大)を確実に実施することが最重要課題といえます。

今回の屋久島町の木造新庁舎建設により、新たな取組として森林保全と木材の普及等に関する協定「屋久島の森と生きる」を全国の工務店等31社と締結し、屋久島地杉の流通を確保するとともに屋久島の森林の保全・整備に役立て、販路及び供給量の拡大を図っていくこととされています。庁舎建設時に使用した各種機械類(自動カンナ・モルダー加工機等)についても、さらに活用を図り杉材等の加工販売を行い、島内の林業・木材産業の活性化に繋げることとされています。また、公共建築物等木材利用促進法及び森林環境税等が活用できる項目を積極的に進めることや屋久島町と姉妹都市の熊本県菊陽町との連携も重要と考えられます。

これからの屋久島の100年を見据えながら、「チーム屋久島」として更なる結束力を深め、屋久島森林管理署及び当センターにおいても積極的に参画し木材の需要拡大に努め、多様な生態系保全の観点からもバランスのとれた、持続可能な森林づくりへ取り組んで行く考えです。(おわり)



写真1. 中庭を囲む全景



写真2. 屋久島産材をフルに活用した空間

ヤクスギランド森林教室 (8月18日)

屋久島レクリエーションの森保護管理協議会では、夏休みを利用した恒例行事である「夏休み親子森林教室」を当センター、屋久島森林管理署及び(公財)屋久島環境文化財団の協賛のもと、ヤクスギランドにおいて開催しました。

標高約1,000mにあるヤクスギランドの当日の気温は21度でやや曇り気味ながら下界と違って快適な気候の中、児童、保護者ら21名が参加し、3班に分かれて50分コースを散策しました。

レク森職員が解説者として、屋久島の地質、気候、屋久杉や土埋木、貴重な植物や動物など屋久島の魅力を子供たちにも分かりやすいように丁寧に説明し、参加者からは、「屋久島についてとても良く理解ができた」「自然を肌で感じながらの散策で充実した時間だった」などの声が聞かれました。



屋久島の自然を体感する子供たち

屋久島のコケ植物（第2回）

—— 苔類（タイ類・ツノゴケ類） ——

片桐 知之（公益財団法人服部植物研究所）

コケ植物（蘚苔類とも呼ばれ、セン類・タイ類・ツノゴケ類を含む）の宝庫として知られる屋久島ですが、今回は苔類（タイ類・ツノゴケ類）の特徴をお伝えします。

①屋久島には日本の苔類の半分がある

屋久島には日本に生育が知られているコケ植物（約 1900 種）の 1/3 が分布しているのですが、苔類に限るとなんと日本の苔類の 1/2 にあたる約 300 種が分布しています。屋久島ではコケ植物の生育に好ましい蘚苔林とも呼ばれる雨や霧が多く常に湿潤な森が広範囲に存在しており、地面、岩、樹木の幹や枝、葉の上など森のあらゆる場所に多種多様な苔類が繁茂しています。さらに、熱帯～亜熱帯に広く分布する南方系の種と高山帯に生育する北方系の種の両方がみられることも屋久島の苔類相の特徴です。

日本では屋久島だけに分布する種は 10 以上にのぼり、その多くは絶滅危惧種に指定されています。しかしながら、世界でも屋久島にだけ生育する屋久島固有の苔類というのが知られていないのは興味深いところです。

②名前に屋久島がつく苔類が多い

1900 年代から世界の苔学者を惹きつけてやまない屋久島からはこれまでに 30 種以上の苔類が新種として記載されています。ヤクシマゴケ *Isotachis japonica* Steph. やヤクシマアミバゴケ *Hattoria yakushimensis* (Horik.) R.M.Schust. (図 1) のように和名や学名に屋久島がつく苔類も約 10 種あります。

③最近確認された希少種と確認できない絶滅危惧種

ゴマダラヤスデゴケ *Frullania pseudoalstonii* Tsudo & J.Haseg. (図 2) は 2006 年に宮崎県延岡市から新種として記載されてから報告が無く、これまでに分布域が不明でした。2018 年に 2 カ所目となる生育地が花揚川から報告され、南九州に広く分布する可能性が示唆されるようになりました。

ヤクシマオヤコゴケ *Schistochila yakushimensis* N.Ohnishi & Deguchi は 2003 年にモッコム岳に生育する植物体を基に新種記載され、屋久島とタイのドイ・インタノン山にのみ生育が知られていました。しかし、その後の調査でもほとんど生育が確認されておらず絶滅が心配されています。

④新発見は森の外にもある

国内では人家周辺に広く生育しているウキゴケ科 Ricciaceae の種が実は屋久島ではほとんど見つかっていません。これは、おそらく人家周辺の調査が十分に行われていないためです。屋久島に行ったからには苔むした森の中を調査したいという気持ちもわかりますが、思いもよらない新発見は海岸沿いの道路から数十歩の何気ない場所に潜んでいるのかもしれない。（つづく）



図 1. ヤクシマアミバゴケ (植物体は幅約 1mm).



図 2. ゴマダラヤスデゴケ (植物体は幅約 0.5mm).

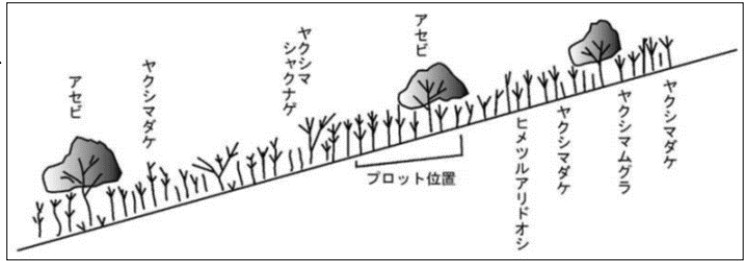


屋久島中央部地域の垂直方向植生モニタリング調査（平成 29 年度）

●No.5 プロット（標高：1,800 m 面積：200 m²）

焼野三叉路から宮之浦岳に向かう登山道上の斜面に設定。植生は一面が高密度なヤクシマダケ群落であり、ヤクシマシヤクナゲやアセビなどが混生。

【毎木・植生調査】 合計 15 種が確認された。高木層、亜高木層を欠き、低木層及び草本層のみ成立する。ヤクシカの嗜好性植物であるヤクシマダケが優占していた。



No.5プロット群落縦断面図

H24年度調査結果と比較すると植生の大きな変化はないが、今回の調査では低木層でヤクシカの嗜好性植物であるアセビの増加が確認された。なお、草本層の大きな変化は確認されなかったが、H24年度調査でわずかに確認されていたオオゴカヨウオウレンやスギ等6種は確認されなかった。植被率に大きな変化はなかった。

【周辺植生】 概ねプロット内と同様であるが、プロット内に出現する種の他にヤクシマヒメバライチゴやヒカゲノカズラなどが確認された。

【過年度からの比較及び今後の動態予測】 H24年度調査ではH19年度調査と比較した結果、植生の大きな変化はなかった。今回の調査の結果、低木層では嗜好性植物のアセビの増加が確認された。なお、草本層の大きな変化は確認されなかったが、H24年度調査でわずかに確認されていたオオゴカヨウオウレンとスギは確認されなかった。

ヤクシカの生息数が増加に転じることなく現在のまま推移した場合、ヤクシマダケの生育状況も変わらないと考えられるが、生息数が増加に転じた場合、ヤクシマダケの食害による矮小化、アオスゲやコマヤマカタバミといった嗜好性植物の減少や消滅、嗜好性植物の割合の増加が考えられる。

巨樹・著名木 屋久杉 大洞杉

江戸時代に伐採されて、その場に横たわっている。中は大きな空洞になっているが、利用できる部分を切り取った跡がはっきりと残されている。この幹に対応する切



り株もあり、ウィルソン株と同じように江戸時代の人々の行為を伝えている。

着生する木本類は、スギ、ヒノキ、サクラツツジ、ヤマグルマ、ハイノキ等が着生している。

周辺部の植生は、スギ、ヒメシャラ、ハイノキ、サクラツツジ等が成育している。江戸時代に伐採され、土埋木（放棄された残材或いは根株）として横たわっており、ハイノキなどの周辺植生におおわれている。

- ・ 胸高周囲：8.3m（残材）
- ・ 樹齢：不明
- ・ 場所：栗生歩道沿い
- ・ 標高：1070m

参考文献：屋久杉巨樹・著名木 改訂版(H11.7)

